



花に囲まれた写真館

池沢写真館の店先には、ポピー、ラベンダー、アマリリス、紫陽花をはじめ初夏の花が、所狭しと咲いている。松、椿などもある。水笠通2丁目の池沢佳和さん（六二才）の家は大正時代に建てられ、今回の地震で北側に大きく傾いて倒れた。当時、家を飛び出し東へ行っても南へ行っても町が燃えていて、消防車のホースが路上に沢山あったが水が出ておらず、やむなく家の前でたたずんでいた。

幸いなことに火が止まって、町内の人たちと建築中の新長田図書館へ避難し、皆さんのお世話で多忙な毎日を送っていた。二月のある日、三宮センター街を歩いていると花屋さんが目にとまりゼラニウムを二鉢買って壊れた家の横に植えた。ペランダで植えていたシヤクナゲと早咲きの椿も生き残っていた。……気がなごんだ。

やがて家を解体し、平成七年六月にプレハブを建てて写真館を再開した。

引き続き花の苗を買っては植えていると、通りがかりの皆が見てくれて「心がなごむ」と声をかけられ、年中絶やさないようにと買ったそうだ。ある時、北区鈴蘭台の方がわざわざダツラを持ってきたくれたりもした。池沢さんの育てている花を数えると百五十もあった。

やがてこの写真館も区画整理で防災公園になるそうだ。

人・街・ながた 震災資料室だより

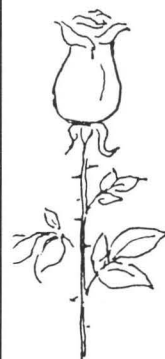
人・街・ながた
震災資料室 発行
〒653 神戸市長田区北町3-4-13
電話(078)579-2311
発行人/寿 広文
編集人/武川・福谷

第17号

もくじ

- 1 草花々より花一輪
- 2 皆さんの声、2
- 3 アンケートより
- 4 提供資料の紹介

草花々より花一輪



石田 久美子

関西学院大学総合政策学部安保教授のゼミ「差別と人権」をテーマとした授業の中で、本づくりを目指して参加型学習を実践し、教授と学生が一冊の本にまとめたものである。安保教授は、あとがきで「私たちは生きたというよりもむしろ生かされたということ。つまり生かされて、生きるということの重要な意味を学ぶことができたとような気がする。」と貴重な体験を評価されている。

「私は、主に長田区のアジアタウンのまちづくりに関してフィールドワークを行い、長田区役所の方にもお話を聞きました。本を書く上でお世話になりましたので、感謝の気持ちで本を送らせていただきます。

人権と共生のまちづくり

安保 則夫編著



提供資料の紹介

阪神・淡路大震災復興誌「第2巻」

発行：21世紀ひょうご創造協会

大震災から三年余りが過ぎ、被災地の復興は被災者自身は勿論関係者の懸命な努力により進められてきた。しかし、いまなおさまざまな理由から、復興もできず、苦しみの中にいる被災者や企業もある。被災者や被災地域間に格差が目立ち始め、復興に向けての課題もより個別化、多様化しているといえる。この本には、平成8年4月から平成9年3月末までの1年間に発行、公表された資料やデータに基づき、復興への過程・出来事が記されている。

第一部総論では、震災の教訓、復旧・復興の状況、今後の課題等を取り上げている。

第二部各論で、生活・文化・住宅・福祉・保健・医療・教育・産業・雇用・都市計画・まちづくり・都市インフラ・防災の各分野

について具体的に復興施策、問題点等を検証し、今後の課題にも言及している。

しかし、被災地の人々にとって、現状の受けとめ方はさまざまであろう。あの時の衝撃と混乱の記憶に一定の距離を置いて、冷静に自分や周囲を見つめたり、生活のリズムを取り戻して毎日を楽しむ心のゆとりや安堵感を回復できた人々もいれば、依然として変わらぬ仮住まいの生活の中で、かえって将来に対する不安や焦燥感を募らせる人々もいる。被災直後には程度の差はあれ被災者・被災企業として、共通の感慨を持つていたが、三年が過ぎて、それぞれの復興の度合に差が生じて、以前のような一体感が薄れていく傾向があり、一部には震災の記憶の風化も懸念される。

また、震災以前から問題とされていた高齢化社会への対応、社会の成熟化による価値観の変化への対応等を包含するまちづくりのあり方への対応なくしては、震災によって失われた活力を完全に回復することは難しいことがわかってきた。いわば「構造的な課題の壁」に直面しているといえよう。

来場者の声 2

「資料室展」に来場された方からの感想・意見の中から一部を紹介します。

この他にも多数の貴重なご意見をいただき、ありがとうございました。



「JRで新長田駅に久しぶりに下車。是非新長田周辺を見てみたいと思っていた。素晴らしいピフレホールをながめ、神戸の復興の姿をみた感じがした。地域の方々のふれあいの場のピフレホールのありかたのほのぼのさを感じました。」

(須磨区・女・56才)

「3年の年月の経過と共に忘れていた記憶がよみがえってきた。復興の困難さが思われる。」

(長田区・男・69才)

「鷹取地区千歳4丁目にて五〇年住み、鷹取市場に買物に行き思い出の家や店など焼け跡を見て、くやしさと悲しさに涙がとまりません。私は、空襲の街をみました。何故か涙があつた時は出なかつたのですが、焼け跡を見たり、時が流れても悲しいです。早く復興を見たく、今度は立派になった街を見てうれし涙を流したいと思います。」

(明石市・女・76才)

「神戸が震災にあうなんて絶対に無いと信じて七〇年夢であつてほしいあの日、着のみのまま逃げて帰つてみれば家は丸焼け、あれから丸3年、今日、震災資料室を拝見し色々資料を見せていただき涙と感動で手が震えてこれ以上書けません。」

(匿名)

「野田北部鷹取の人びとのビデオに改めて強い感銘を受けた。印刷物よりビデオの方が理解できる。長田区役所でビデオ等を集め常に見れるように出来ると良いと思っています。」

(西宮市・男・71才)

「資料室一同の皆様の活動に感動しました。展示内容に当時に想い、何かしら荘厳な気持ちになるとともにそれらの無茶苦茶になった中から、充分でない点もあるとはいえ、ここまで復興して、その新しい象徴がこの新しいビルに思え、地震後のガレキの写真とこの真新しいビルとの対比からある意味で人間のすごさを感じました。本活動を定期的に続けられることを切に希望します。」

(垂水区・男・30才)



「街の復興、施設などの復興はさすが経済大国日本の力をまざまざと見せつける。多くの思い、記録、体験が言葉となり文章となり又映像となり様々な形となって伝えられている。しかし、なぜか実体験をした本人としてあの時、ほんの一瞬であつたがお互いに助け合う、思いやるといふ心が働いた。その気持ちはしばらく続いた。しかし、3年たつて毎朝顔を合わす人々の間には何もなかったようなそれ以前のそれこそ隣は何をする人ぞに戻つてしまったようなそんなさみしい気持ちでいる。」

(長田区・男・55才)



「日本は地震国である。又地球のあちこちに日々地震が起こっている。我々人間は又何時この災難が起こらないとは限らない。常に災害に対する心構えを以て人生を送るべきと思う。せめて少しでも自分のことは自分で守るべく常日頃より心掛けるべきと思う。人に頼ることのみ考えるべきでない。少しでもあまつた力があれば弱い人の手助けをしたいと考えている。」

(須磨区・女・81才)

「その頃だけが辛かつたのではなくその後が(今現在も)大変です。父も病気で働けなくなり嫁入り前の姉と2人で元の場所に家を建てました。二十一世紀のローンの旅です。やつとの思いで建てましたが、ただ単に新築にしたいからと思つて建てたのではないので、いろんな思いがあります。家ができたからといって忘れることはありません。あの日のことは、生きていく限り忘れないでしょう。無理かもしれないけれど他の東京などの人たちも明日はわが身と普段から考えていて欲しいと思います。」

(長田区・女・29才)

「もう3年いやまだ3年なのに、毎日のせわしさに早く通り過ぎた。遠い過去の様に忘れかねない。今日は以前から(いや昔)お世話になつた方の消息をたずねてきたのですが震災後1年位の間と同様、また分かんかった。当催しがあるのも知らず、ふらつとのぞいてみたら、貴重な資料に出会えて、いまわしくもあり又忘れてはならないものに触れて良かった。翌日より会社の対策本部として毎日大阪から被災者に会いに来たが、長田区のなんと遠かつたことが、東も西からも思い出した。ご冥福を祈る。資料を大切に常設保存して下さい。」

(豊中市・男・53才)

「震災被害では神戸市内で長田区が最も被害甚大であつたそうですね。人口も4万人以上も激減したままになっている由、これも心がいたみます。私もかつては灘区に住んでおりました。長田区の被害よりは小さかつたのですが、まだまだ復旧は遠い将来のような気がします。」

(兵庫区・女・67才)